

「商標」のデザインには、神話や伝説が深く張り付いている。旅先でも商品の中味よりもトレードマークにひきつけられ、財布の紐が緩くなるように動物の商標。逆さ蝙蝠のケースや、駱駝のタバコ、太鼓に足をかけた獅子のマッチなどは全て外来種でわが国でもよく知られてきた。ヨーロッパとアジアをつなぐ「生命デザイン」を追いかけると、最も気になるのが「馬」に関わる商標である。デンマークの国立博物館の至宝「サン・チャリオット」は馬が太陽を牽つぱり闇夜から連れ還つてくる像で、紀元前二〇〇〇年紀につくられた。イギリスのウイスキー「ホワイト・ホース」はプリトン（ケルト）時代、石灰層に刻まれた巨大画に由来する。インドからケルト神話までの印欧語族あるいはそれを越えた「ユーロ＝アジア世界」でも、太陽エネルギーがホースパワーに結びつけられている。三〇〇〇年後の今日、石油会社に「太陽」のトレードマークがある。天の太陽と一体の火を噴く動力を暗示する。さて暗示的といえればヨーロッパの有名なチヨコレートの商標。重税に苦しむ民のため夫のマーシア伯に抗議し馬に乗せられ町中を引きまわされた裸の妃がトレードマーク。二〇世紀創業のベルギーの菓子会社が「馬と女性」をなぜ選んだのか。



「馬と女神」のユーロ＝アジア世界

鶴岡 真弓

プロフィール
多摩美術大学 芸術人類学研究所・所長。専門は美術文明史。ケルト文明や、ユーラシア文明の生命デザイン交流史を調査中。おもな著書に『ケルトノ装飾的思考』（1993年）、『ケルト美術』（2001年）。以上、ちくま学芸文庫、『装飾の神話学』『ケルトの歴史』（2009年）。以上、河出書房新社）『装飾』の美術文明史』（2004年、NHK出版）、『装飾する魂』（1997年、平凡社）、『阿修羅のジュエリー』（2011年、イーストプレス）など多数。

ベルギーはカエサル『ガリア戦記』にも記された「ベルガエ族」の本拠地で、ケルト、ガリア文明ゆかりの国だ。「ボヘミア」は「ポイイ」族、「パリ」は「パリシー」族などと同様ケルトの部族名をそのまま地名・国名としている。フランスと地続きのケルト考古学のスポットで、大陸のケルト文化をブリテン島に繋いだのがベルガエ族。ゴディヴィア伝説の奥にも、ガロローマ時代の「馬の女神エポナ」や、ウエルズ人の「馬乙女リアノン」が控えている。

彼女らは本来は太陽のように見えてはならない、触れることは許されないエネルギーであった。（キリストや聖徳太子のように）馬という熱と光に関わり生まれる皇子プリデリがウエルズの神話にも登場する。馬小屋の暗がりが高貴な皇子、光の子が生まれるという奇跡は、ユーロ＝アジア世界を、駆け抜けてきた。

ゴディヴィアは裸体である。唯一彼女の輝く裸体を盗み見たのが「ピーピング・トム」で、神の怒りで視力、光を奪われた。これは卑俗な覗き屋についてのおまけの逸話ではなく、馬と太陽の女神の超越性を示唆している。

最大の熱と光は、人間が征してはならないエネルギーなのだと語っている。ユーロ＝アジアの神話は現代にこそ宿っているのである。

月刊
みんぱく
9月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
「馬と女神」のユーロ＝アジア世界 鶴岡 真弓</p> <p>2 特集
【企画展】 記憶をつなぐ
津波災害と文化遺産</p> <p>3 記憶をつなぐ——過去・現在・そして未来 吉田 憲司</p> <p>4 民俗芸能と地域社会
——岩手県沿岸部における秘密 橋本 裕之</p> <p>6 震災と保存科学 日高 真吾</p> <p>8 波の伝わる谷——開村伝承と津波 小谷 竜介</p> <p>9 大学生と取り組む文化財レスキュー 加藤 幸治
防災の英知を海外に
——津波防災教材としての「稲むらの火」 林 勲男</p> <p>10 研究フォーラム
制憲議会解散後のネパールを「包摂」から考える
名和 克郎</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
動かし続けることにこだわる博物館
工場から産業技術記念館へ
成田 年秀</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
面白いモノ その1
ハレのかたちとしてのつくりもの
笹原 亮二</p> <p>18 多文化をあきなら
救済から自立へのサポート
山岸 美穂</p> <p>20 異聞逸聞
太平洋の島々における日本人移民の足跡
丹羽 典生</p> <p>21 みんぱく私の逸品
男性用サンダル
吉本 忍</p> <p>22 フィールドで考える
覚醒する自己——四川省郊外の客家意識
河合 洋尚</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|